



おおつなみ
大津波サイバイバル

2004年12月26日

インドネシア・バンダアチエの体験から学ぶ

たいけん まな

しずおかだいがく ほうさいそうどう
静岡大学 防災総合センター

TDMRC, Syiah Kuala University, Indonesia
LIPI, Indonesia

はじめに

この本は 2004年12月26日におきたスマトラ・アンダマン地震がひきおこしたインド洋大津波に遭遇し生き延びた人の体験談集です。体験談をもとに描いた絵を使って、地震が起きてから津波が襲来し、生き延びるまでにおきたことを順番に示しているのが特徴です。

津波は地震、台風、火山噴火といった自然災害の中で最大級の破壊力を持っています。1771年4月24日に沖縄の石垣島周辺で発生した津波では1万2千人以上が亡くなり島が壊滅しました。1896年6月15日に岩手県の三陸海岸を襲った津波では2万2千人もの人が亡くなっています。このように津波では1万人を超える死者を出すことも珍しくありません。

また、津波はとおくまで影響をおよぼすという特徴も持っています。2010年2月27日に南米チリの沖合で発生したマグニチュード8.8という巨大地震によってひきおこされた津波は太平洋を横断して日本列島にも到達しました。事前に津波警報が出されたこともあって亡くなった人や怪我をした人はいませんでしたが、魚の養殖いかなどには大きな被害が出ました。この地震が発生した場所のすぐ南側では1960年5月22日にマグニチュード9.5という超巨大地震が起きており、そのときには日本でも142人が亡くなるという被害も出ています。地球の裏側で起きたものであっても被害を及ぼす可能性があるのが津波のもうひとつの恐ろしさです。

我々の住む静岡県は過去に何回も東海地震に襲われ、そのたびに津波でも大きな被害を受けています。津波への備えが必要な場所なのです。津波から生き延びた人の証言から津波の実態をしり、将来の津波に備えるきっかけにして欲しいと考えています。

2010年3月 静岡大学防災総合センター 林 能成

2004年スマトラ・アンダマン地震

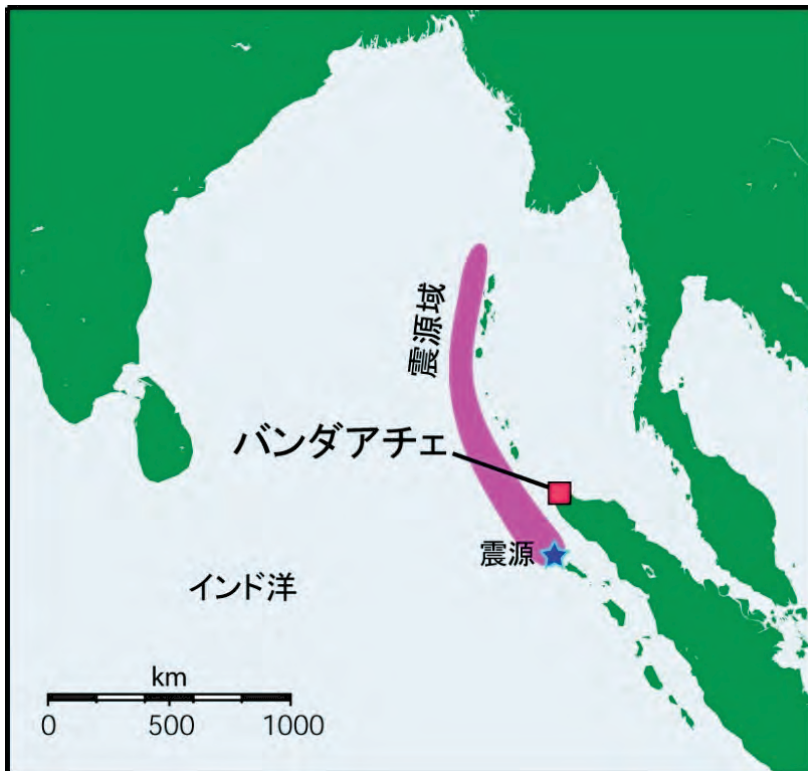
発生日時 2004年12月26日午前7時58分(現地時間)

震源 インドネシア・スマトラ島沖

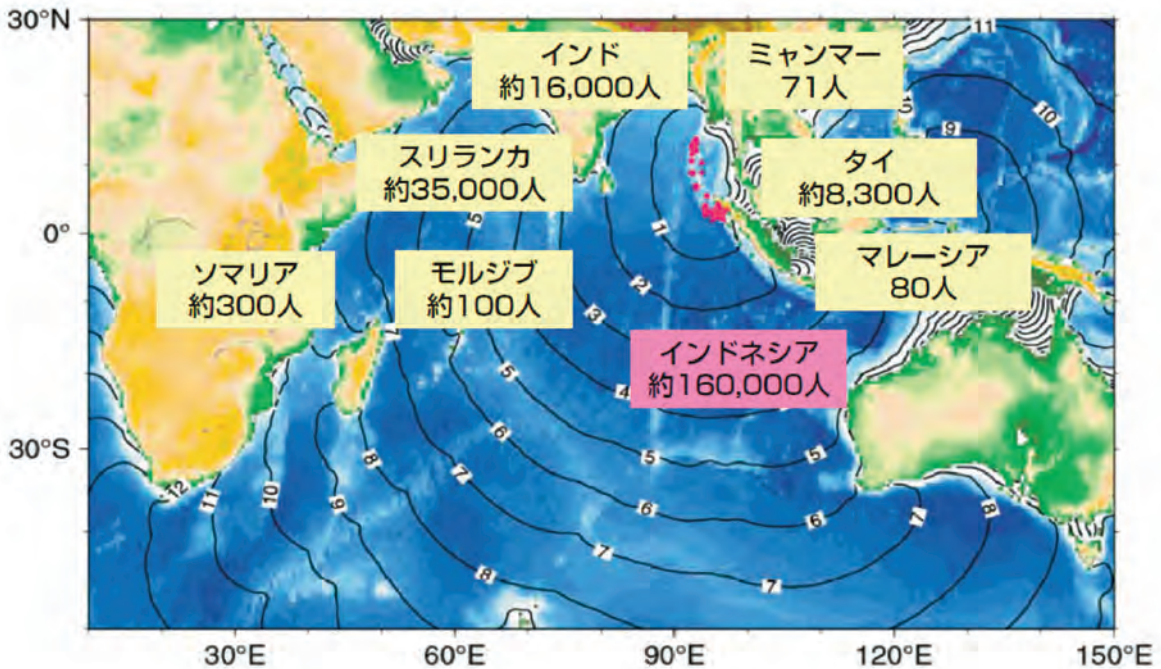
マグニチュード 9.3(モーメントマグニチュード)

インド・オーストラリアプレートがユーラシアプレートの下へと沈み込むプレート境界で発生した地震。地震の破壊はスマトラ島沖の南端からはじまり、最終的には1000 km以上離れたアンダマン諸島付近まで10分近くかけて広がっていった。マグニチュード9を超える超巨大地震は、このようにとてつもなく広い領域がずれ動く。

この地震にともない最大波高30m以上の津波が発生し、インド洋に面した諸国で大きな被害を出した。死者・行方不明者は合計で22万人以上におよぶ。地震の揺れによる建物倒壊で亡くなった人は少なく、ほとんどは津波が原因である。



2004年スマトラ・アンダマン地震の震源と震源域



地震および津波による死者・行方不明者数。インド洋沿岸諸国で被害が出たが、特にインドネシアに集中している。海にかかっている数字は津波の到達時間で、たとえばスリランカでは津波が到達したのは2時間後である。(東京大学地震研究所・佐竹健治教授提供)



この本で紹介する人たちが津波に遭遇した場所。インドネシア・バンダアチェとその近郊の村々は、この津波最大の被災地で、10万人以上の人々が犠牲になった。

1. 地震の激しい揺れ

- 立ってられないほどの激しい揺れが5分以上も続いた。
- しゃがみこんだり木につかまったりして、揺れがおさまるまで耐えた。

➤ 2階で宿題をしているときに地震が起きた。最初のうちは動けたので、1階において外に飛び出した。揺れはどんどん強くなり、木にしがみついて揺れがおさまるのを待った。(ナニさん)

➤ 揺れで目がさめ、飛び起きて外にでた。地震の揺れは5分くらい続いた。(デディスクマさん)

➤ 海で泳いでいたので揺れに気がつかなかった。海岸が大騒ぎになっていたのを見て泳いで戻り、足をついたら、ものすごい揺れで立ってられなかった。(アボーイさん)



き 木につかまってゆれがおさまるまで耐えた。(ナニさん)



うみ およ 海で泳いでいるときはゆれに気がつかなかった。足をあしをついたら立っていられなかった。(アボーイさん)

2. ゆれがおさまって

- 一度揺れがおさまっても、地震は何度も続いた。
- 家や家族のことが心配になった。
- 「津波」のことは知らなかった。高いところへ避難しようなんて考えなかった。

▶ たてもの めだ ひがい 建物に目立った被害はなかったが、ゆれがおさまっても何度も地震が続くので、300人の生徒を誘導して外にでた。津波が来ることは予想しなかった。(サムスリさん)

▶ かいすいよくじょう じたく かえ つなみ まったあたま じたく しんぱい 海水浴場から自宅に帰った。津波のことは全く頭になく、自宅が心配だったからだ。(アボーイさん)

▶ りょうし うみ き 漁師なので海のことが気になり、まだ揺れているうちに海を見にいった。(バハールさん)

▶ しょうひん たな お よしん そと と だ みせ 商品が棚から落ちてしまったので、余震のたびに外に飛び出しながらも店の片付けをしていた。(プトウリさん)



よしん つづ にん せいと ひろば ゆうどう
余震が続くので、300人の生徒をとりあえず広場へ誘導した。(サムスリさん)



じたく しんぱい かいすいよく き あ いえ かえ
自宅が心配になり海水浴を切り上げて家に帰った。(アボーイさん)

3. 津波の前触れ

- 海岸では今まで見たことがないほど潮がひいた。
- 早い潮の流れで転覆する船もあった。
- 干上がった海に取り残された魚をとる人もいた。

➤ いままでに見たことがないくらい海がひいて、取り残された魚が跳ねていた。まわりの人は海に降りて、魚をとって喜んでいた。(バハールさん)

➤ 海の方からヘリコプターのようなブルブルブルという音が聞こえた。(ジョエルさん)

➤ 海の方からダイナマイトが爆発するようなドーン、ドーンという音が聞こえた。(サムスリさん)

➤ 海岸に居た人が「海がひいて水がなくなり、船も転覆している」といって走ってきた。すぐ近くの川を見に行くと、川の水もなくなっていた。(デディスクマさん)

4. 津波がおそってくる

- 雨も降っていないのに、何で水が海からやってくるのか理解できなかった。
- 逃げる間もなく、飲み込まれてしまった。
- 津波には泥やガレキが大量に含まれていた。

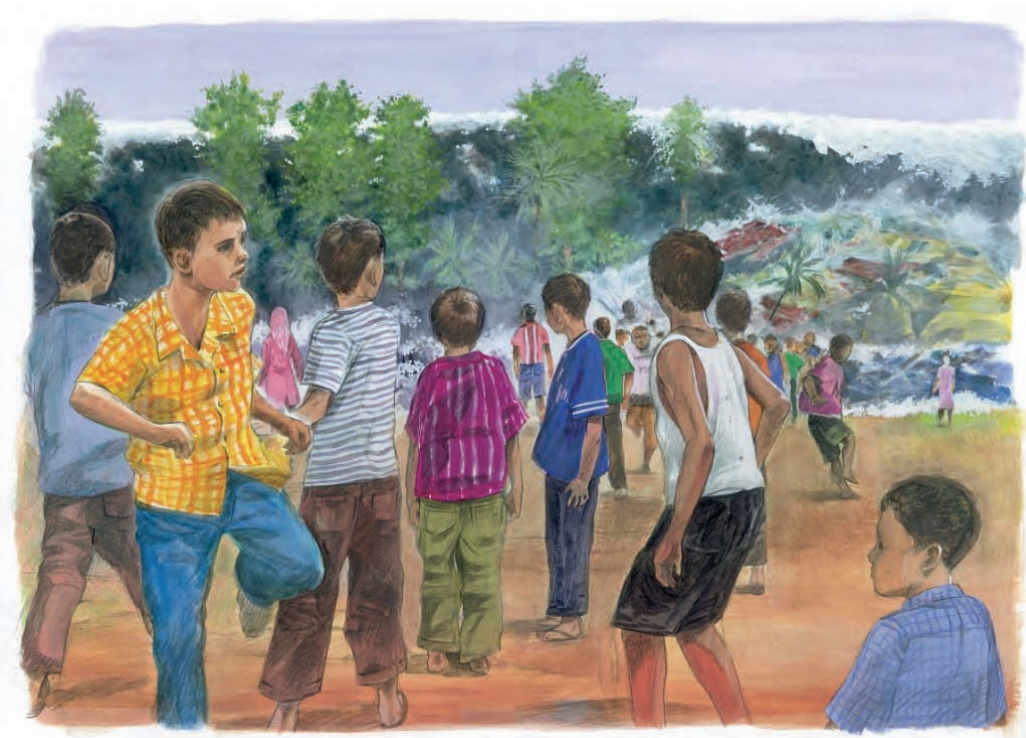
➤ 校舎の背後から突然、津波がきた。木や建物を倒しながら猛スピードで迫ってきた。(サムスリさん)

➤ 市場で海の方に目をやったら、遠くからすごい波が迫ってきているのが見えた。(アフリザルさん)

➤ ひいた海の向こうから白っぽい波をたてて、大きな波が近づいてきているのが見えた。(バハールさん)

➤ 遠くの道路上を叫びながら走ってくる人と、その後ろにせまる水が見えた。(ナニさん)

➤ 「水がきたー」という声でしたので外にでたら、雨も降っていないのに本当に足首くらいまでの深さの水があった。(プトウリさん)



こうしゃ き たお もう つなみ せま
校舎や木を倒しながら猛スピードで津波が迫ってきた。(サムスリさん)



おき いま けいけん たか なみ せま み
沖から今まで経験のない高い波が迫ってくるのが見えた。(アフリザルさん)



まち なか なが くるま の こ いきお なが つなみ
街の中に流れこみ車などを飲み込みながら勢いよく流れる津波。(ビデオより)



あめ ふ あしくび みず いちめん ひろ
雨も降っていないのに、足首くらいまでの水が一面に広がってきた。(プウリさん)

5. 津波から逃げろ！

- 逃げる間もなく、のみこまれた。
- 近所で一番高いモスクをめざして走った。
- 家族をのせて海から離れる方向へ全速力でバイクを走らせた。

津波のスピードは速く、近くに逃げられるような高台もなかった。のみこまれて、気をうしなった。(サムスリさん)

家族を乗せて海岸から離れる方向へバイクを全速力で走らせた。(アフリザルさん)

急いで村に戻り、家族を探した。波を見ていない家族は荷物を取りに一度家へ帰りがたがった。(バハールさん)

家族と一緒に2階へかけあがった。水はどんどん高くなっていったが、運よく2階までは乗らなかった。(ナニさん)

近くのモスクをめざして走った。そこは人でいっぱいだったが、壁をよじ登り屋上に逃げ込んだ。(プトゥリさん)



たす 助けられながら かべ 壁をよじのぼって おくじょう ひなん モスクの屋上に避難した。(プトゥリさん)



かぞく 家族をのせて ぜんそくりよく 全速力で はし バイクを走らせ つなみ 津波から に 逃げた。(アフリザルさん)

6. 津波からいきのびた

- モスクの屋上へ逃げ延び、大量に流れ込む水を見ていた。
- 津波に飲み込まれ意識を失って流されたが、運よく木につかまることができた。

津波にのみこまれて意識を失ったが、2kmくらい流されたところで気をとりもどした。流れが弱くなったところで木につかまって助かったが、全身傷だらけだった。
(サムスリさん)

バイクで走って津波が来ないところまで逃げ切ることができた。(アフリザルさん)

家族を説得し、何ももたずに裏山へ走った。ギリギリのところでは高いところへ逃げられた。(バハールさん)

モスクの屋上は人でいっぱいだった。そこから大量に流れ込んでくる水をながめていた。(プトウリさん)



おくじょう　なが　こ　たいりょう　みず　こわ　いえ　ざんがい　み　みず
モスクの屋上から流れ込んでくる大量の水と壊れた家の残骸などを見ていた。水はなかなかひかなかった。(プトウリさん)



なが　き　き　たす
2kmくらい流されたところで気をとりもどし、木につかまって助かった。(サムスリさん)





7. 津波が去って

- 道には泥やガレキ、そして死体などが山積みになっていた。
- 海岸付近の集落ではモスクしか残らなかった集落も少なくなかった。

▶ 午後2時くらいになって、なんとか歩けるくらいまで水がひいたので、自宅に向けて歩きはじめた。道にはたくさんのガレキや泥が積もり、さらには無数の死体がころがっているような状態だった。(プトウリさん)

▶ 夕方になって、海から離れたところにあった兄の家へ家族全員でうつった。(ナニさん)

▶ お昼すぎには水がなくなったので、丘から降りて、流れ着いたものをつかって友人たちと避難小屋を作った。また津波がきてもすぐに逃げられるよう、山のふもとに作った。(ジョエルさん)



おくじょう　なが　こ　たいりょう　みず　こわ　いえ　ざんがい　み　みず
 モスクの屋上から流れ込んでくる大量の水と壊れた家の残骸などを見ていた。水はなかなかひかなかった。(プトウリさん)



なが　くるま　こわ　いえ　さんらん　つなみご　しない　だいがくていきょう
 流されてきた車や壊れた家が散乱する津波後のバンダアチェ市内。(シャクアラ大学提供)



ぼん き のこ すべ はかい なに
1本の木を残して全てのものが破壊しつくされ何もなくなってしまったバンダアチェ
しこうがい ようす だいがくていきょう
市郊外の様子。(シャクアラ大学提供)



なか さが だ いたい はこ ひとひと だいがくていきょう
ガレキの中から探し出された遺体を運ぶ人々。(シャクアラ大学提供)



しゃんちゅうおう のこ じめん くさ なが
 モスク(写真中央)だけを残して、地面の草まであらゆるものが流されてしまった
 どうにしかん しゅうらく だいがくていきょう
 スマトラ島西海岸の集落。(シャクアラ大学提供)



ちゅうおう どうろ さかい したはんぶん すべ いえ なが うえはんぶん ちけい
 中央の道路を境に下半分はほぼ全ての家が流されてしまったが、上半分は地形
 たちき えいきょう いえ のこ だいがくていきょう
 や立木などの影響でかなりの家が残った。(シャクアラ大学提供)

つなみ 津波からいきのびるために

1. 高台に住む

津波の危険性が高いことがわかっている地域では、あらかじめ高台に住むことが一番の津波対策になります。岩手県の三陸地方では、津波に備えて集落全体が高いところへ移転したところがあります。三重県でも津波の危険性の高い集落を集団で高いところへ移転させようという計画があります。

2. 津波避難場所の整備と確認

津波に飲み込まれたら生き残ることはほとんど不可能です。津波が来る前に安全な高いところへ逃げなければなりません。地域や行政と協力して避難場所を整備・維持しておきましょう。歩ける範囲に高台がない場合は、鉄筋コンクリートの建物を緊急避難場所にしたり、「津波避難タワー」を設置しているところもあります。また本当にその避難場所へたどりつくことができるのか、ハザードマップをもとに実際に歩いて確認することも重要です。



つなみひなん
津波避難タワー
わかやまけんたなべし
(和歌山県田辺市)

3. 強い地震を感じたり、津波警報が出たら避難する

多くの津波には、自然界からの事前のメッセージがあります。強く長く続く地震の揺れは津波があとに続く危険性が高いです。そして海が干上がるような異常な引き潮は津波の前触れです。

日本では気象庁から即座に津波警報も出されます。静岡県で想定されている東海地震による津波は日本他の地方に較べて津波が来るまでの時間が短いです。異変を感じたり、警報が出たことを知ったら、急いで津波避難場所へ逃げましょう。

4. 一度引いても、しばらくは戻らない

津波は何度も繰り返します。また、後から来る波の方が威力がある場合もあります。避難したら警報が解除されるまで低いところには戻らないようにしましょう。少なくとも半日は高いところにとどまりましょう。

つなみ 津波のメカニズム

つなみ はっせい 1. 津波の発生

おおじしん うみ はっせい だんそう がんばん はかい かいてい
大地震が海で発生すると断層にそって岩盤が破壊され、海底がもりあがったり、へ
こんだりします。その結果、その上の水も上下して、周囲に流れ、元の平らな水面に
もど 戻ろうとします。これが津波です。

つなみ きぼ かいてい たいせき だいしやう き
津波の規模はもりあがった海底の体積の大小で決まります。マグニチュードが7の
ばあい はんい じやうげ ていど
場合は30-50kmの範囲が1mくらい上下する程度ですが、マグニチュード9.3のスマ
ラ-アンダマン地震では、長さ1000km以上、海底のもりあがりも10m以上になりました。

うみ なか ひろ 2. 海の中へ広がっていく

はっせい つなみ しゅうい ひろ なみ つた そくど うみ ふか ふか
発生した津波は周囲へ広がっていきます。この波の伝わる速度は海の深さが深い
ほど速く、水深4000m(太平洋の平均深さ)では時速700km以上になります。これは
ひこうき おな ほうれつ はや
飛行機と同じくらいの猛烈な速さです。

かいがんちか たか 3. 海岸近くで高くなる

かいがん ちか うみ あさ つなみ そくど おそ うし
海岸に近づくにつれて海は浅くなるので、津波の速度は遅くなります。そのため後ろか
ら波がどんどん追いついてしまい、波の高さが高くなっていきます。また波高が高くなり
やすい地形があります。たとえばV字型をした湾では入口に較べて奥が狭いので、奥に
ちけい じがた わん いろぐち くら おく せま おく
行くほど水が集中して波高が高くなります。岬の先端も津波の流れが集中しやすく、波高
たか けいこう
が高くなる傾向があります。

りゅうそく けいぞくじかん 4. 流速・継続時間

つなみ かいがん こ りくじやう しんにゆう はや も ばあい
津波は海岸を超えて陸上に侵入しても、かなりの速さを持っている場合があります。そ
のため例え50cmといった低い水位でも人間を簡単に流してしまう力があります。また、水
たど ひく すいい にんげん かんたん なが ちから すい
位があがってから引くまでの時間が10分以上になる場合が多く、ちょっとした隙間からも
い ひ じかん ぶんじやう ばあい おお すきま
しんすい
浸水してしまいます。さらに半日以上繰り返し津波が来ることも少なくありません。



1. プトゥリさん 当時19歳、大学生 バンダアチェ市街地で津波に遭遇

あの朝はバンダアチェ中心にあるバイトウラフマンモスク(グランドモスク)のすぐ近くにあった。そこに家族経営の店があって、姉と二人で店番をしていた。8時くらいに地震の揺れが始まり、店から外に飛び出した。揺れている間は、立っていられなかった。地震の揺れは15分くらい続いたように感じた。地震のあと、近所の店にいた多くの方は、自宅の様子を見るために帰っていった。一緒に店番をしていた姉もバイクで自宅に帰ったが、私は店の中に戻って一人で片付けをはじめた。棚からいろいろなものが落ちてしまい、店の中に散乱していた。

最初の地震がおさまったあと、またかなり大きな地震があった。この時も店から飛び出し、店の前でゆれがおさまるのを待った。通りがかりの人から、バンダアチェで一番大きなデパートが地震で大きく壊れたという話も聞いた。

引き続き、店の片づけをしていると、外で「水が来た」という声があった。そこで、店から出てみると、本当にくるぶしくらいまで水がきていた。大急ぎで水が来るのと反対方向にあったグランドモスクへ向けて走って逃げはじめた。

モスクに着くと既に人がいっぱい集まっていて敷地に入ることすらできなかった。そこで、フェンスを乗り越えて敷地に入り、壁をよじ登ってモスクの屋上へ避難した。今見ると、とても登れそうもない高さの壁だが、どういうわけか登ることができた。たぶん周りの人に助けをもらい登ったのだろうが記憶はない。

避難したモスクの屋上は人でいっぱいだった。海の方から絶え間なく流れこんでくる海水と、そこに浮かぶ物凄い量のガレキを眺めていた。30分くらいすると水の流れは止まったが、あたり一面が水びだしになり水はなかなかひかなかったので5時間以上モスクの屋上で過ごした。

それぞれの津波体験

午後2時くらいになって、なんとか歩けるくらいまで水がひいたので、徒歩で自宅に向かって歩いた。道にはたくさんのガレキや泥が積もり、さらには無数の死体ごろがっているような状態だった。普段の倍以上、2時間歩いて自宅にたどりついた。幸いなことに家族は全員無事だった。

大地震のあと、津波が来ることは全く知らなかった。2日後にテレビで聞いて、はじめてTsunamiという言葉を知った。



2. ナニさん 当時19歳、大学生 バンダアチェ市内で津波に遭遇

地震は自宅2階で宿題をしているときに起きた。これほどの強い揺れははじめての経験で、急いで1階におりて外に飛び出し、家の前の木にしがみついて揺れがおさまるのを待った。揺れは5分以上続いたように思う。道路を走っていた車やオートバイは停まり、皆が地面に座って揺れがおさまるのを待っていた。

家は地震では被害を受けなかった。そこで一度部屋に戻って貴重品が入ったかばんを持ち出して家の外で家族と一緒にいた。8時20分くらいに海の方から「水がきたー」と言いながら人が走ってきた。この日は天気の良い日だったこともあり、水が来ると言っても信じることはできなかった。しかし、しばらくすると500mくらい離れたところまで本当に水がきているのが見え、道路は人であふれかえった。急いで2階に逃げた。

水位は1～2分でみるみる上昇し、8時45分頃には1階が完全に水没するくらいまで上昇した。その水位レベルが12時頃まで続いた。夕方17時を過ぎた頃に、家族全員で2kmほど離れた兄の家へ歩いて避難した。道には泥が積もり、その中にはガラスなどが入っていたので歩くのに注意が必要だった。



3. アボーイさん 当時19歳、大学生 バンダアチェ郊外ウレリーで津波に遭遇

津波が起きた日曜日は、朝7時前からウレリーの海水浴場に友達と遊びに行っていた。地震が起きた8時頃には海に入って泳いでいた。沖の方から浜を見ると、皆、大騒ぎしていた。なんだろうと思い、岸に近いところまで戻り、足をついたら地面が激しく揺れていて立つことができなかった。この時、皆が大騒ぎになっているのは地震が起きていたからということが、はじめてわかった。しばらくの間は動くことができず、揺れがおさまるまではその場にしゃがんでいるしかなかった。

揺れている最中にまず心配になったのは、市内にある自分のアパートが無事か否かということだった。そこで、動けるようになって海からあがり、自分のオートバイのところへ友達と一緒に走った。オートバイは地震の揺れで転倒して、ガソリンがタンクから流れ出てしまっていた。自分はバイクを起し、友達も路上の店にガソリンを買いに走りバイクを動けるようにした。2人乗りで3kmほど離れた自宅へ向けて走った。自分たち以外にもかなりの数の人が自宅が心配になって帰っていった。地震のあとに津波が来るという知識はなかったため、避難という意識はまったくなかった。

家に着くと建物には全く被害がなく、周囲の家も全て無事だった。部屋の中に入ってしばらくしたら外が騒がしくなったので道に出た。すると海の方から「水がきた」と叫びながらたくさんの方が走ってきた。自分も何のことかわからなかったが、とりあえず皆と一緒に走って逃げた。少しばかり内陸まで逃げたら津波はこなかった。

しばらくは大学の教室などで過ごした。実家の村の家族に自分の無事を伝えることは忘れていたが、津波から3日ほどたったら携帯電話が無料になったので電話をかけてみた。家族は「あの日の朝は海に行っていた」と友達から聞いて、もうあきらめていたので、とても驚いていた。



4. サムスリさん 当時24歳、イスラム教寄宿学校教師 インド洋に面したランプーク村で津波に遭遇

地震が起きたのは日曜日の朝。ランプーク村のプサントレン(イスラム教寄宿学校)に居た。村はバンダアチェ中心部からラビラビ(ミニバス)で30分程度のところにあり、インド洋に面している。津波前の人口は7000人くらいだった。

地震は揺れ始めてから30秒くらいで徐々に揺れが大きくなり5分以上継続したように感じた。幸い寄宿舎や教室の建物には大きな被害はなく、けがをした生徒も居なかった。余震も続いたので、生徒・教師全員が校庭に避難した。

そのまましばらく校庭にいたが、海の方から爆破音(近くにあるセメント鉱山の発破音に似ていた)のような音が聞こえてきた。しかし校庭から海の方には校舎があり、またその背後には大きな木もあったので海は見えなかったため、何の音かは理解できなかった。その直後、非常に早い流れで高さ1~2メートルの第一波が学校の校舎などありとあらゆるものを破壊して迫ってきた。その背後には高さ10メートルくらいの「黒い水の壁」が続いていた。逃げる間もなく、津波に飲み込まれ、水の中を上へ下へと激しく流された。地震でゆれはじめてから津波が来るまでは20分くらいだったと思う。

津波には、海水だけでなく壊れた校舎の残骸などがたくさん混ざっていたので、それらにぶつかって手や足など全身に大きな怪我おった。2キロメートルくらい流されてラムルム村まで来たところで、はえていた立木につかまることができた。10分弱つかまっていたら、少し水位が下がり流れの勢いも弱まったので、水の中から出てちょっとした高まりへ歩いて逃げた。大きな木の下にテーブルがあって日陰になっていたので、そこで1時間半くらい休んだ。少し体力が回復したので、また15分くらい歩いて道に出たところ、オートバイの人が通りかかって助けられた。オートバイにのせてもらい非常救護テントに運ばれた。



5. バハールさん 当時33歳、漁師(津波の時は自宅) インド洋に面したプロット村で津波に遭遇

地震が発生した時は自宅で寝ていた。揺れを感じて外にでた。5ー10分揺れが続いたと思う。揺れている最中に3回爆発音のような音が聞こえた。1回目は揺れ始めてから2分くらいで、その後も2分きざみくらいで音は続いた。揺れがおさまらないうちに、20人くらいで海を見にいった。

海岸に着いたら水がひきはじめていて、最終的には2kmくらい沖まで引いた。水がひいたところには魚がたくさん転がっていて、多くの人が「今日はずいている！」と言い、魚を取りに降りた。そうこうするうちに、引いた波の後方、海岸から5kmくらいのところにかなり高い波が迫ってきているのが見えた。波の色は黒っぽかった。

この波を見て、300mほど離れた自宅へ走って戻った。しかし自宅には誰もいなかったの、さらに100mくらい離れた自分の母の家へ向かった。母の家に行く途中で妻と子どもたちに会い、急いで高いところへ逃げよう促し一緒に逃げた。妻は自宅に寄って物を持ち出したいと言ったがやめさせた。150mくらい離れた山へ向かって走り、山の上へ逃げた。津波が来る前に高いところへ行くことができた。津波は山の上まで到達した。

何人かの人には海岸で「波が来ないように」祈っていた。モスクに祈りに行っている人もたくさんいた。自分の母もモスクで津波に飲み込まれて行方不明になったと聞いている。

丘の上から津波を眺めていた。はじめの波は右手方向からやってきて、丘の裾野を通り左手方向へ抜けていった。これはあまり早くなかった。その後、正面から早い津波がやってきて、丘にぶつかった。この2波目は湾全体を覆いつくすように進んできた。沖では波の高さはそんなに高くない(5m程度)と思ったが、陸に近づくときとどんどん高くなったように見えた。津波は5分おきくらいに3回きたが、その後は静かになった。1波目がきたのが8時30から8時50分くらいの間だったと思う。3回の波が去ったあとは、海は何もなかったかのようにとても静かになった。



6. デディスクマさん 当時24歳、溶接工 インド洋に面したロックガ村で津波に遭遇

地震が起きたとき、自宅から少し離れた溶接工場の作業場で寝ていた。揺れで目がさめ、飛び起きて外にでた。地震の揺れは5分くらい続いた。ゆれがおさまり、部屋に戻って服を着て近くのコーヒーショップへ向かった。コーヒーを注文し、他の客と地震の話をしていた。コーヒーを半分くらい飲んだところで、海岸近くに居た人が「沖まで水がひいている」と言って店にやってきた。近くの橋へ行って川の様子を見たところ川もすっかり水がなくなっていた。海岸では200mくらい水が引いているとか、セメント運搬船が転覆していると人々が言っているのも聞いた。

この様子を見て家のことが心配になり、バイクにのって700-800m離れた自宅へ向かった。ドンドンという音(銃撃音のようなもの)を3回くらい聞いたが、国軍かGAMだと思ってたいては気にしなかった。自宅脇のモスクの前でバイクをとめて歩き始め20mくらいいったところで、海の方に森のような盛り上がりが見えたが何だか理解できなかった。すると、近くに居た子供が「水がきた」と言った。振り返ったところ、少し離れたところの電柱が倒れた。そこでその子を抱きかかえ、一緒にいたお母さんに逃げろと声をかけて10mくらい走った。一瞬、後ろを振り返ったところ、背後すぐのところまで水が迫っており、3歩走ったら津波に飲み込まれてしまった。水の中で3回くらい回転させられて、記憶がなくなった。数百m流され、どこかの家の机の下にいるところで、抱えている子供が「おじさんおきて」と言って気を取り戻した。そのときには、自分のまわりには水はなかった。自分は手足に少し怪我をしていたが、子供は無傷だった。



7. ジョエルさん 当時36歳、商店経営 バンダアチェ郊外ランパシ・エンキン で津波に遭遇

地震のときは自宅隣のおじさんの家で、おじさん、自分、友人2人の合計4人でコーヒーを飲んでいました。揺れが強かったので急いで家族の無事を確認するため家に戻った。家族は妻と娘2人で、自分が自宅に戻ったら家族は既に家の外にでていた。ゆれがおさまるまでの約10分間、家族を抱いて揺れに耐えていた。地震で家は一部壊れたが崩れることはなかった。

この地震で集落のモスクの塔が壊れたと近所の人が言っていたので、1人で見に行った。そこで親戚のおじさんに会い、まだ朝食を食べていないというので、家族の許可を得て幹線道路沿いのコーヒーショップに行った。

そのときヘリコプターのような音が聞こえた。続いて海の方から「海があがってきた(le laut di ek.)」と叫びながらたくさんの人が走ってきた。しかし、おじさんが「ありえないことだ」と言ったので、引き続き食事をした。

しばらくすると、道路の上を津波がせまってくるのが見えた。200mほど離れたところで気がついた。高さはそれほど高くはない。色は黒っぽい色で、速さは非常に早く、生えていた木や家の残骸など、あらゆるものを飲み込んだような状態だった。時刻は9時よりは前、8時45分か50分くらいだったと思う。

この水を見て急いで自宅に走って帰ったが、既に家族は誰もいなくなっていた。周囲を見回したら、小高い丘の上にたくさんの人が集まっているのが見えたので自分もそこへ行った。家族は既にその丘の上へ避難していた。

そのうちに小さな子どもたちが「おなかすいた」と騒ぎだしたので、秘密小屋のようなところから水と食料を持ってきて、子どもたちに与えた。丘の上には昼12時くらいまでいたが、その後、丘から降りて、流れ着いたものをつかって友人たちとふもとに避難小屋を作った。



8. アフリザルさん 当時26歳、漁師 バンダアチェ郊ウレリーで津波に遭遇

地震がおきたとき、ウレリーの海岸脇にある魚市場にいた。揺れは5分くらい続き、魚市場の建物は一部が壊れた。揺れが収まって10分くらいすると、海岸から沖へと海水が引いていった。そして、その背後から水が迫ってくるのが見えた。

これは大変なことが起こるに違いないと思い、150mほど離れた自宅へバイクで帰り妻、5歳の息子、1歳の娘を連れ出した。1台のバイクに家族4人が乗り、とにかく海から離れる方向へ走った。道には大勢の人がいたが皆よけてくれた。バイクのクラクションをトラックのものに改造していて、それを鳴らしながら爆走したので、トラックが来るとしてよけたようだった。逃げるときは全速力だったので、時速80kmくらいは出ていたように思う。後ろで何が起きたのかを振り返る余裕もなかったが、とにかく逃げ切ることができた。



9. ウィルマンさん 当時27歳、エビ養殖業 バンダアチェ郊外ウレリーで津波に遭遇

ウレリーのエビ養殖池で働いているときに地震が起こった。揺れている間は立っていられず座りこんだ。揺れは10分くらい続いたと思う。揺れがおさまったあと、まわりに被害らしきものが見当たらなかったので仕事に戻った。揺れがおさまって10-20分後、黒い2階立ての家よりも高い水が迫ってくるのが見えた。「水が来た」と叫びながら1キロ程度離れた自宅集落まで走って戻り小学校へ逃げ込んだ。しかし、小学校の建物もろとも津波に飲み込

それぞれの津波体験

まれ流されてしまった。そのまま1kmほど離れた市の中心部まで流され、そこで木につかまって助かった。大怪我をおってしまったので、自力では木から降りることができなかった。その後、1時間以上木につかまって助けをもとめていたところ近くを自分が住んでいた村の人が通りかかったので、手伝ってもらってようやく木から降りることができた。



10. ムハマド・リダさん 当時22歳、大学生 バンダアチエ郊外ダルサラームで津波に遭遇

あの朝、ジョギングをおえて、家に入ったところで地震が起こった。地震のゆれは5-8分くらい続いた。ゆれている最中は床にはいつくばっていた。ゆれがおさまり、一度家の外に出て、周囲を見回して特に目立った被害もなかったのので家の中へ戻った。その時、家の中には姉1人、妹3人、弟1人そして自分という6人がいた。母はメダンに行っていて不在だった。

家が無事だったので、町の様子を見ようと、バイクにのって出かけた。途中、アチエ川にかかる大きな橋(LAMNYONG)の上で「水が来る」と言った人がいたので、自宅に戻り家族に逃げろといった。最初の波はゆっくりとやってきて、水位は50cmほどまできた。急いで大学のモスクへ向けて歩いた。普段なら徒歩5-8分なのだが、このときは15-20分くらいかかってしまった。人がいっぱいだったためである。道中は水はなかった。着いたところ、モスクはいっぱい、階段のところで妹を座らせ、自分は他の家族を探していた。2波目では大学のグラウンドまで水が来たがモスクは大丈夫だった。夕方3時頃には他の全ての家族に会い無事を確認しあった。



調査に協力いただき、津波の体験談を細部までお聞かせいただいた皆さまに感謝いたします。この冊子に収録された津波の体験談は、2006年12月、2007年2月、2008年3月にバンダアチェおよびその近郊で実施した聞き取り調査で集めたものです。聞き取りは林能成、安藤雅孝、石田瑞穂、ディディック・スギヤントがおこない、アチェ語との通訳はプトゥリ、ナニ、アポーイの3名のシャクアラ大学学生が担当しました。体験談から津波襲来時の様子などを絵画で再現する試みは日本画家・藤田哲也が調査に同行して行ったものです。

大津波サバイバル

2004年12月26日インドネシア・バンダアチェの体験から学ぶ

発行日 2010年3月10日
編集 林 能成(静岡大学防災総合センター・准教授)
発行 静岡大学防災総合センター
〒422-8529 静岡市駿河区大谷836

本冊子は文部科学省防災教育支援事業の支援を受けて作成しました。

